２０２２年度

愛知の社会科教育

（第54集）

もくじ

Ⅰ　教育研究愛知県集会……1
　1　小学校分科会
　2　中学校分科会

Ⅱ　本年度の研究内容……3
　1　小学校第５学年における実践例
　2　中学校第１学年公民分野における実践例

愛知教職員組合連合会　教育課程研究委員会社会科部会
２０２２年度　教育課程研究委員

◎部長　○副部長

ブロック推薦

名古屋			尾張			三河		
氏名	単組	学校名	氏名	単組	学校名	氏名	単組	学校名
◎後藤　俊輔	名古屋	金城小	早瀬　友浩	尾張旭	西中	○池部　弘樹	碧南	東中
○西脇　佑	名古屋	神丘中	伊藤　宏将	海部	弥富北中	荻野　達成	豊橋	石巻中

第68～71次教育研究全国集会リポート提出者

68次			69次			70次			71次		
氏名	単組	学校名	氏名	単組	学校名	氏名	単組	学校名	氏名	単組	学校名
甲斐俊晃	名古屋	中小田井小	古居成幸	西尾	八ツ面小	――	――	――	中西　悠	岡崎	豊富小
松田拓也	豊橋	東陽中	酒井孝康	岡崎	城南小	――	――	――	野口哲平	名古屋	志段味中

第72次教育研究全国大会リポート提出者　湊　悠希　（名古屋・大須小）
河本　晋也　（春日井・西部中）

Ⅰ　教育研究愛知県集会

1　小学校分科会

(1) 全体の感想

地域教材を活用した実践や対話的な活動を通して、互いの考えを交流する実践、思考ツールやＩＣＴ機器を有効に活用しながら課題を追究する実践が報告された。

討論では、「よりよい社会の実現を目指し、主体的に考えるための学習活動の工夫」や「身近な事象を教材化した学習活動の工夫と育てたい力」、「先人のはたらきや政治の役割を、切実感をもって追究できる学習活動の工夫と育てたい力」などについて、それぞれの実践にもとづいて熱心に話し合われた。本年度は総括討論を行わなかったが、参加者によって、活発な質疑と柱に沿った議論が行われた。

(2) 討論の内容

①　国土・産業学習

地域的な特徴を的確にとらえ、子どもたちが切実感をもって主体的に課題を追究する実践や、子どもたちが調べたことをもとに多角的に考え表現したり、ＩＣＴ機器や思考ツールを活用したりして考えを深めたりする実践などが報告された。討論では、よりよい社会の実現をめざし、主体的に考えさせるための学習活動の工夫について話し合われた。助言者からは、課題や教材に切実感をもつなど、子どもの主体的な姿を具体的にとらえ、授業をする必要があるとの助言を得た。

②　地域学習

自分たちの住む町の変遷やそこに暮らす人々の願いについて知ることで、追究する意欲を高め主体的に取り組ませる実践や、課題解決にむけて思考ツールやワークシートを活用して自分たちにできることを考える実践などが報告された。討論では、身近な地域素材となる資料やゲストティーチャーを児童の思考の流れに合わせて出会わせたり、疑問をもたせたりすることで、効果的な教材になることが確認された。助言者からは、地域教材を活用することで、子どもたちは学習課題を自分事としてとらえ直したり、学びを深めたりすることができるとの助言を得た。

③　歴史・公民学習

戦争体験者のインタビュー映像や具体物を使った疑似体験から歴史的事象を身近なものとしてとらえさせる実践や、地域社会のあり方について資料やゲストティーチャーを活用したり、調査活動や対話的な学習を通したりして、よりよい社会づくりへの考えを深める実践が報告された。討論では、子どもたちが先人のはたらきや政治の役割を、切実感をもって追究することで、どのような力を身につけていくのか話し合われた。そして、子どもたちが主体的に学習できるようにすることが、確かな社会認識を育むために重要であると確認された。助言者からは、よりよい社会をつくろうとする人々やその想いと出会いながら学習活動を行うことが重要であるとの助言を得た。

(3)　今後に残された課題

①　子どもたちが切実感をもって主体的に追究するための教材や学習活動の工夫

②　加速度的に変化する現代社会の中で、よりよい社会の実現のための社会科学習のあり方

２　中学校分科会

(1) 全体の感想

地域ごとに異なるよさ課題を生かし、自分事としてとらえ、仲間と共に課題を追究する実践や、歴史的事象を的確にとらえ、自分の考えを比較したり、練り直したりする実践、身近な社会問題を取り上げて、対話を重視しながら、多面的・多角的に問題を把握し、課題解決をはかり、社会参画意識を高める実践が報告された。

県内１８本のリポート報告をもとに、子どもにとってよりよい学びをめざし、学習活動のあり方や教材開発の工夫などについて積極的に質疑や討論が行われ、確かな成果と次年度への課題が浮き彫りとなった。

(2) 討論の内容

全体を通して、質疑や討論の中で、「先がわからない時代に子どもたちが未来を創造できる社会科学習のあり方」について多く議論された。各分野ごとの内容は以下の通り。

①　地理的分野

子どもたちの学ぶ意欲を高める学習活動のあり方や教材開発の工夫について話し合われた。その中で、地域を学習し、社会的事象と実生活との関連性に着目した学びができるよう、ＩＣＴ機器を使っての視覚化や地域

素材の利用の大切さが確認された。また、子どもの自らが課題を追究し続けられることの重要性にもふれられ、子どもの思考が連続し、切実感が高まる授業展開の重要性が議論された。

②　歴史的分野

子どもたちが切実感を高めて追究にむかうことの重要性が議論され、さまざまな人の立場になって考えることで、先人の働きを理解できることが確認された。また、その中で、子どもが、事実を丹念にとらえて価値判断をすることで、子ども自身が時代の当事者としての自覚をもち、歴史的事象に確かな考えをもてることが確認された。

③　公民的分野

社会参画の意欲を高めるための学習活動のあり方について議論が行われた。その中で、当事者意識を高めるためには、身近な課題と生活とのつながりに気付き、課題解決にむけて追究する中での意思決定の機会の重要性が確認された。ゲストティーチャーの話を聞いたり、模擬裁判を行ったりする事例も報告された。また、子どもの課題解決への意欲が持続できる教材の重要性にもふれられ、子どもと教師が単元の中でめざす世の中の姿や、そのために必要な要素を明確にして追究を行うことで主体的に課題解決にむかう姿が期待できると確認され、社会参画への意欲も高まること確認された。

④　指導・助言

助言者からは、何が重要か、子ども自身が考えるのが社会科だと指摘された。教師主導ではなく、子ども自らが課題を生み出し、子どもが主役となり追究し続ける授業の重要性が再確認された。

(3) 今後に残された課題

①　先が分からない時代に、子どもたちが未来を創造することができる社会科学習のあり方

②　子どもたちが主体的に考えるための学習活動の工夫

Ⅱ　本年度の研究内容

教育課程編成にあたっての基本的な考え

○「基礎・基本」
　必要な語句や表現、技能などは、「どの子どもにも必要な学力」である。社会科では、資料を読み取り、それらを根拠にして自分の考えを形成し、それらを表現する学習活動を行うことである。
○「生きてはたらく力」
　学んだことを日常生活に生かす「活用する学力」である。社会科では、話合いを通してさまざまな意見にふれ、自他の意見を尊重しながら合意形成をはかる学習活動を通して、自他の意見を尊重する態度を養うことである。

【小学校第５学年における実践例】

仲間とかかわりあいながら、課題意識をもって、社会に参画しようとする子どもの育成
―「低い土地のくらしー六名を住み続けられるまちにー」の実践を通して―

１　主題設定の理由

本学級の児童は、教師や友だちの話を真剣に聞いたり、問題演習に集中して取り組んだりすることができる。その反面、指示を待つ姿勢が強く、自ら疑問をもち探究していくような姿があまり見られない。また、新型コロナウイルス感染症の影響により、仲間と協働で成し遂げる経験が乏しく、学校外の「人」「もの」「こと」との出会いも希薄になっている。「予測困難な時代」を生きていく子どもたちの、課題を見出す力や他者とかかわりながら課題を解決する力を高めていくことの必要性を強く感じた。

本学区は、川の下流沿いに位置し、住宅街の開発や大規模マンションの建設により、人口が急増している反面、乙川の川底より海抜が低い地域もあり、平成 20 年 8 月末豪雨では深刻な浸水被害に遭った。しかし、学区内で豪雨被害があったことを知っている子どもは、学級の 34 人中 3 人のみであった。「持続可能な開発目標（ＳＤＧｓ）」にも「住み続けられるまちづくりを」という目標があげられているように、災害の被害を減らすために社会参画していくことは、現代を生きる子どもたちにとって重要な経験になると考えられる。学区の水害問題を取り上げることで、子どもたちには切実感をもって課題を追究し、社会認識を深めながら、よりよい社会づくりにむけて、自分たちにできることを考え、行動しようとする姿を求めたいと考えた。

目指す子どもの姿
　仲間とかかわりあいながら、課題意識をもって、社会に参画しようとする子ども

２　仮説と手だて

仮説Ⅰ「仲間とかかわりあいながら、課題意識をもつ」
　自分たちが暮らす学区の多様な「人・もの・こと」と出合わせたり、考えを深める対話的活動を設けたりすれば、子どもたちは切実感と確かな社会認識力をもち、課題解決にむかうだろう。

○　手だて①　学区の多様な「人・もの・こと」との出合い

学区の災害を教材とすることで、切実感を高める。また、地形図、浸水実績図などの資料や、水害対策を推進する地域人材、建造物と出合わせることで、多様な出合いにより獲得した、多角的な社会認識をもとに課題をとらえ、解決にむかおうとする力をのばす。

○　手だて②　考えを深める対話的活動

３～４人の小集団や学級での話合い、教師からの問い、外部講師へのインタビュー活動を設ける。それにより、自分の考えと他者の考えを比較したり、新たな疑問や課題をもったりし、考えを深め、よりよい解決を目指すことを促す。

仮説Ⅱ「仲間とかかわりあいながら、社会に参画しようとする」
「仲間」意識をもたせたり、タブレット端末を活用したりして、かかわりあいと発信の場を設ければ、子どもたちは主体的に課題解決に向かい、互いの考えを認め合いながら、よりよい社会づくりのために自分たちにできることを考え、行動しようとするだろう。

○　手だて③　「仲間」意識をもった活動

学級を「六名学区水害調査団」と呼称することで、学級は「仲間」であり、課題解決の主体は自分たちであるという自覚をもたせる。また、外部講師や行政に対しても「仲間」と認識させ、共に自分たちにできることを考え行動しようとする意識を高める。

○　手だて④タブレット端末を活用した、かかわりあいと発信

タブレット端末を活用し、仲間と協働して考えを深める場や、子どもの思いに応じて学んできたことを実際に発信する場を設ける。それにより、互いの考えを認め合いながら、よりよい社会づくりのための課題解決に迫ることができるようにする。

3　単元構想

時	学習活動　（ 課題　・活動内容　**子どもの思い** ）	手だて
1	日本の様々な地形を知ろう ・日本には山地や平野、火山や海岸線など、様々な地形があることを知る。 ・自分たちの住む学区は土地が低い地域で、水害が起きやすいことを知る。 **六名学区で昔水害があったなんて知らなかった。**	①
2	六名学区と水の歴史を見つけよう ・学区の歴史をたどり、水害と戦ってきたことを知る。 ・平成 20 年８月末豪雨の浸水実績図をもとに、学区の水害の危険度を知る。 **六名学区は長い間水と戦ってきた。私の家があるあたりも昔浸水した。今は大丈夫なのかな？**	②
3 4 5	現場で水害対策を調査しよう ・平成 20 年８月末豪雨の浸水実績図をもとに、どのエリアをどのような視点で調査したいか話し合う。 ・豪雨被害にあった地域を見学する。 ・見学で見つけた水害対策と、新たな疑問を、話し合いにより共有する。 **雨水ポンプ場や避難所があることは分かったけど、本当に安心なのかな。**	① ② ③
6 7 8	長坂さんに聞き取り調査をしよう ・学区の水害対策に長年携わってきた、総代会長の長坂さんに聞きたいことを考える。 ・長坂さんへのインタビューを行う。 ・長坂さんの話から分かったことや感じたことを、話し合いにより共有する。 **長坂さんは長年、学区のために努力している。ポンプ場が完成したら、かなり安心。** **自分たち自身がやるべきこともある。自分の身は自分で守らないといけない。**	① ② ③
9	アンケート結果の気になるところを見つけよう ・事前に学区の住民に行ったアンケートをもとに、各家庭の実態を把握と課題を把握する。 **実際に被害にあった人もたくさんいる。でも、被害を知らずに住んでいる人も多い。** **長坂さんの言っていた対策ができていない人が多い。このままではいけない。**	① ②
10	輪中の人々の工夫や努力を見つけよう ・岐阜県海津市の輪中では、どのような水害対策をしているか把握する。 ・輪中の人々の工夫や努力のうち、六名学区でも取り入れたいことを検討する。 **輪中の人々はこんなに工夫や努力をしている。六名でもまねしたい。**	④
11	集中豪雨に対する六名学区の「安心度」はいくつだろうか ・これまでの学習をもとに、現在の学区の集中豪雨に対する備えが十分かどうかを議論する。 **安心できる「安心度」10とは言えない。このままではいけない。**	① ② ④
12	「安心度」を上げるために、わたしたちに何ができるだろうか ・前時の意見をもとに、自分たちでもできることを話し合う。 **これまで勉強してきた自分たちなら、学区の人に伝えることができる。** **「安心度」を上げるために大切なことを、たくさんの人に伝えたい。** ・何をどのように伝えるかを話し合う。	②
13 14 15	六名学区水害調査団として、学区で暮らす人々に発信しよう ・水害対策を呼び掛けるポスターを制作し、回覧板を利用し学区内に広める。 ・水害対策を呼び掛ける子ども向け動画を制作し、昼の放送を利用し校内に広める。 **テレビを見た低学年から、分かりやすかったって言われたよ。回覧板を見て家族と話したよ。** **わたしたちが伝えたことで、六名学区がもっと安心して暮らせる町になったらいいな。**	② ③ ④

４　研究の実際と考察

次の児童Ａの変容を中心に追いながら、研究の手だての有効性を検証する。

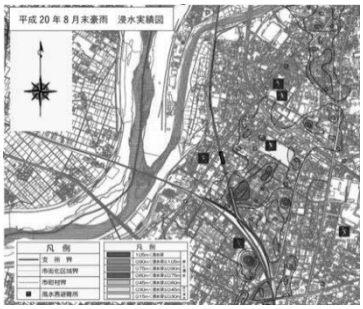
＜児童Ａ＞　好奇心は強いが、疑問を教師に聞くと、回答を得られても得られなくても、そこで満足してしまい、解決まで追究が続かない傾向にある。また、学級でトイレの使い方について話し合ったときには、スリッパをきれいに脱がない人だけに焦点を絞り、他人事のように意見を述べた。本単元を通して、課題意識を継続して追究していく力や、自分事として課題を捉え、社会をよりよくしようとする思いを育てたい。

第１時　学区の地形を知る

【資料１　平成 20 年８月末豪雨時の六名学区の写真】

自分たちが住む学区の地形を意識させるために、地形や災害に関わる写真を提示し、日本のどこの地域かをあてる活動を行う際に、六名学区の写真を紛れ込ませた【資料１】【**手だて①**】。子どもは、「東日本大震災じゃない？」という声を上げたが、六名であることを告げると、子どもたちは「海がないのに水没するんだ」「地震のせい？」と口々に述べた。児童Ａは「六名は海に近くはないけど、川があるので危険だと思いました。でも、六名は都会なので、意外と貴重だと思いました」と振り返っており、学区の地形条件を把握できたことがうかがえる。しかし、水害への危機感については一言述べるにとどまっている。課題意識をもたせるための手だてを講じる必要性を感じた。

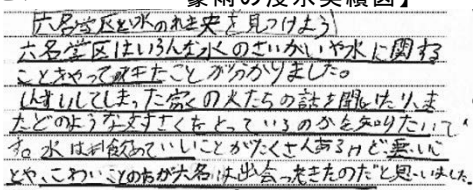
第２時　学区の水害の歴史を知る



【資料２　平成 20 年８月末豪雨の浸水実績図】

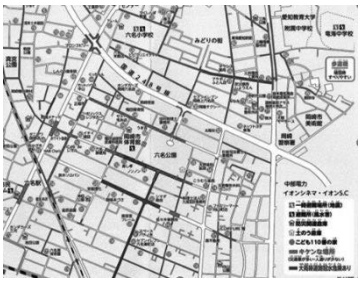
岡崎市では、市制 100 周年に、小学校区ごとに冊子「岡崎まちものがたり」がつくられ、六名学区の冊子は、水害との戦いの歴史が記載されている。これを資料とすることで、子どもは、学区の水害の歴史について切実感をもって学ぶことができた。

さらに、平成 20 年８月末豪雨および東海豪雨での浸水実績図【資料２】を読み取る活動を行った【**手だて①**】。子どもたちは、自宅のある場所や、通学路、よく行く店などが浸水したことを知り、「びっくり」「こわい」などとつぶやいた。児童Ａは振り返りで、「水は悪いことやこわいことの方が六名は出会ってきた」と述べた【資料３】。


六名学区と水のれき史を見つけよう
六名学区はいろんな水のさいかいや水に関わることをやってきたことがわかりました。
はずかしくてしまった家の人たちの話を聞いたりしたどのようなようすをとっているのかを知りたいです。水は利益があっていいことがたくさんあるけど悪いことや、こわいことのほうが六名は出会ってきたのだと思いました。

【資料３　児童Ａの振り返り】

第３～５時　現場で水害対策を調査する



【資料４　安全マップ】

子どもたちの「見に行きたい」という声を受けて「現場で水害対策を調査しよう」という課題を設定した。

調査に行く前に、どこを、どのような視点で見るか考える話合いをチームで行った【**手だて②**】。話合いの資料として、学区の安全マップを配付した【資料４】。これには、大雨時に冠水する危険のある道路や、風水害時の避難所・防災倉庫などが載っているため、視点をもちやすいと考えた【**手だて①**】。前時に配付した浸水実績図と照らし合わせながら、チームで対話することで、子どもたちは「この避難所の場所は適しているのか」「一度浸水したことへの対策はできているのか」といった、一歩踏み込んだ課題意識をもっていた。

【資料５　「六名学区水害調査団」の名札】

翌日、子どもたちの机の上に名札を置いた【資料５】【**手だて③**】。「これからみんなは、六名小の５年生ではなく『六名学区水害調査団』として調査するんだよ」と話すと、子どもた

ちは「早く調査に行きたい」というやる気がみなぎらせ、すぐに名札を首に下げた。

調査には、タブレット端末を持って行き、見つけた対策や気になったところを、写真に撮るようにした。高床化してある家や傾斜のある道路、防災倉庫のほかに、子どもたちが注目したのは、公園に建設中の雨水ポンプ場である【資料６】**【手だて①】**。子どもたちは建設中の建屋を見て、大きさを実感した。また、工事現場の近くの看板から、このポンプ場が、１時間で学校のプール80杯を空にする能力があることを知り、「すごい」と声をあげた。

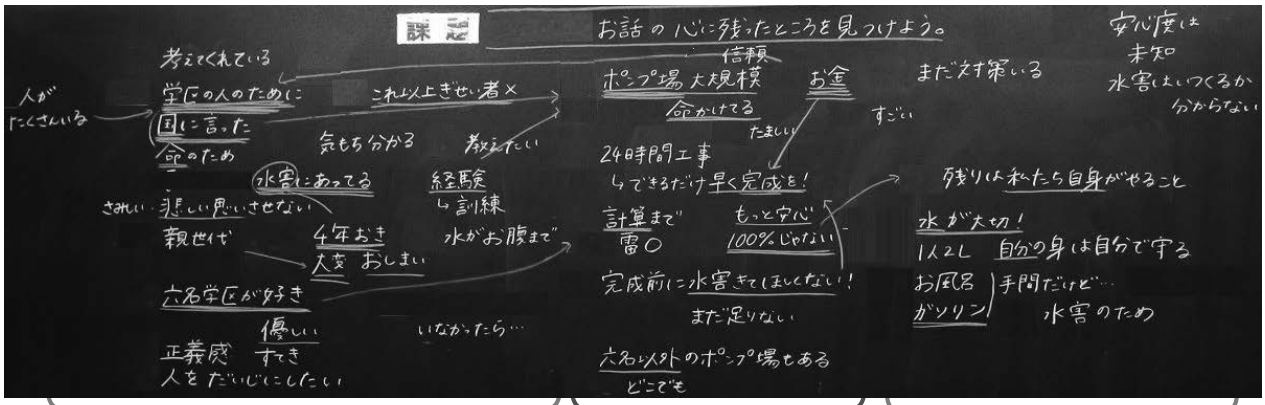
【資料６　建設中の雨水ポンプ場を見る子ども】

学校に戻り、見つけた対策を学級で共有する時間を設けた。ポンプ場の話題で「貯水池が満水になったらどうなるのかな」と揺さぶりをかけた**【手だて②】**。子どもからは「ポンプ場が完成する前に雨がたくさん降ったら、あふれちゃう」「ポンプで川にいっぱい水を送ったら、川があふれるかもしれない」などの発言があった。振り返りには、現地調査と話合いを通して生じたさらなる疑問が多く書かれ、対話による課題意識の高まりが見取れた。

第６～８時　地域の人に聞き取り調査する

六名学区の「岡崎まちものがたり」の作成委員であり、雨水ポンプ場の計画をはじめ、学区の治水事業に長年携わってきた地域の人から話を聞くことにした**【手だて①】**。ここでは、地域の人に一方的に話してもらうのではなく、子どもの質問に答えてもらう形にした**【手だて②】**。子どもは「六名学区水害対策調査団」の名札を着けて臨んだ**【手だて③】**。「ポンプ場は何年か経っても壊れないですか？」はじめに手をあげ質問したのは、児童Ａである。地域の人は、質問に答えながら、ポンプ場について語っていった。平成20年８月末豪雨について、体を指して「この高さまで水が浸かった」との説明に、子どもは思わず「えっ」「首まで来てる」という声をあげた。さらに、学区を水害から守るために、雨水ポンプ場のほかに、側溝の整備やマンション開発時の貯水槽設置など、さまざまな働きかけをしてきたことを知った。

聞き取り調査後、「地域の人の話の心に残ったところを見つけよう」という課題で、話し合いを行った**【手だて②】**。子どもたちは、雨水ポンプ場や過去の豪雨のことなどもあげたが、発言の中心となったのは、長坂さんの「学区の人のため」という思いについてであった【資料７】。児童Ａは、聞き取り調査後の長坂さんへの手紙の中に、「地域の人の水害に対する熱い気持ちが伝わってきました。地域の人の熱意を忘れず、水害への対策をしっかりとし、危機感をもって、日々生活していきたいと思います。」と綴った。地域の人の思いにふれ、課題意識と行動への意欲を高めた姿が見て取れた。



「学区の人のため」という地域の人思い　ポンプ場の存在の大きさ　自分たちがやるべきこと

【資料７　長坂さんへの聞き取り調査を振り返る話合いの板書】

第９時　アンケートを分析する

ここでは、５年生（169 名）の保護者対象の「六名学区の水害に関するアンケート」【資料８】の結果を提示した【手だて①】。まずは、質問１～３について気になるところをワークシートに記した後、話合いを行った【手だて②】。ここでは、児童Ａの「平成 20 年８月末豪雨を経験してない人は、怖さを知らないから、次にまた豪雨が来たら対応できないかも」という発言から、新しい住民の水害への意識、という問題につながっていった。また、質問５・６について 125 人中 25 人が「特に何も対策していない」と答えたことについて、多くの子どもが「水害がきたら大変」「命が危ない」と発言した。

1 岡崎市には、いつからすんでいますか
2 2008年に起きた「平成 20 年豪雨」について
ア 六名学区が被害にあったことを知っている
イ 豪雨があったことを知っているが、六名学区の被害は知らない
ウ 初めて聞いた
3 2000 年に起きた「東海豪雨」について（選択肢は2と同じ）
4 平成 20 年豪雨や東海豪雨で被害にあった方は、どのような被害があったか、ご記入ください
5 ご家庭で行っている水害への対策をすべて選択してください。
ア 居住地域の水害リスクを把握している
イ 水害時の避難経路や避難場所を把握している
ウ 非常持ち出し袋を用意している
エ 土のうや水のうを用意している
オ 特に何も対策していない
6 5に加え、そのほかに水害への対策を行っていれば、ご記入ください

【資料８　六名学区の水害に関するアンケート（一部）】

第 10 時　輪中で暮らす人々の工夫や努力を見つける

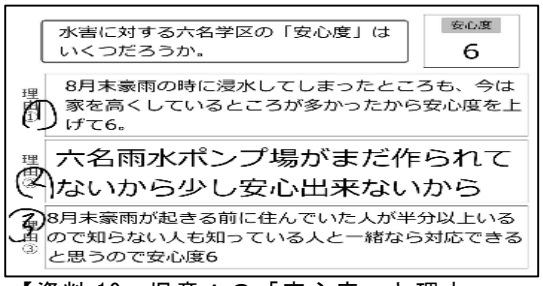
対策をしたい、という思いが高まってきたところで、岐阜県海津市の輪中で暮らす人々が、水害とどのように戦い、水をどのように生かしてきたのかについて教科書から調べた。タブレット端末のアプリ「コラボノート EX」を用い、見つけた情報をチームで整理した【手だて④】。まず、六名と似ているところと違うところを色分けして付箋で貼った上で、変えられない事実（地形・歴史など）と、六名でもまねしたいことに分類した。さらに、まねしたいことの中でも、優先度をつけて付箋を並び替えた。子どもたちは、チームでの話合いを通して、水害対策で大切なことや、自分たちでもできそうなことを判断していくことができた。

第 11 時　「安心度」を議論する

子どもたちは、今安心できるかを気にしていた。そこで、今もし「平成 20 年８月末豪雨」レベルの集中豪雨が来ても、六名学区で安心して過ごせるかどうかを考え、数値化する「安心度」という尺度を設けた。安心できれば 10、できなければ０とし、自分の考えを明確に示せるよう、一人ひとりの机に「安心度バロメーター」を設置した【資料９】。この尺度をもとに、現状の豪雨に対する備えが十分であるかを話し合うことにした【手だて②】

【資料９　安心度バロメーター】

まず、「安心度」とその理由を、タブレット端末のアプリ「スクールタクト」に書き込むことで、自分の考えを明確にした【資料 10】。子どもは、学区の地形や、設備の整備、住民の意識など、様々な側面から理由を述べることができ、これまでの出合いから得た社会認識を生かしながら、多角的に考察できていることがわかる【手だて①】。



【資料 10　児童Ａの「安心度」と理由

「スクールタクト」によって、教師は子どもの考えを把握することができる。活発な話合いになるよう、意図的に指名しながら話合いを進めた【手だて②④】。子どもから、「地域の人」や「ポンプ場」という言葉が多く出たことから、地域の人や雨水ポンプ場との出合いが子どもたちに与えた影響の大きさがわかる。また、子どもたちは、土地が低いという地理的条件や、道路整備等の行政の働き、海津市の例、学区住民による対策など、さまざまな観点で「安心度」を考察していった。友達の発言を聞いて、自分の安心度バロメーターの数値を変える子もおり、話合いにより互いの考えを認め合いながら、考えを深めていく様子が見

られた。最終的に子どもたちの意見は「安心度」３～６に集中した。

第 12 時　自分たちにできることを考える

前時の話合いの板書を「学びの足跡」に載せ、「安心度」７以上の意見がほとんどなかったことを伝えた。「このままでいいかな？」と教師が問うと、子どもたち「ダメ！」と口をそろえて答えた。そこで、「学区で暮らす人々の安心度を上げるために何ができるだろう」と問いかけた。子どもたちは少し考えた後、地域の人から聞いた対策方法や海津市の取り組みをあげ始めた。その中で「地域の人に教えてもらったことを伝えたらいい」と発言した。続いて児童Ａが、「学区に住んでいる人と話し合ったり訓練したりする」と述べた。第９時アンケート分析の授業では「避難経路や避難場所を家族で話したい」と述べていたＡが、この対話をきっかけに、家庭から地域へと視野を広げたことがわかる**【手だて②】**。

子どもたちの「『備える』と『伝える』は自分たちにもできるから、やりたい」という思いを、次の活動につなげた。まず、伝える内容についての話合いをし、学習を生かして、水害対策に有益なものの中から５点を伝えることに決めた。次に、伝える手段について話し合った。話合いの序盤では、「新聞なら書いたことがある」「アニメをつくってみたい」など、自分たちつくり手本位の意見をあげていた。しかし、議論が進むにつれて、「学区のため」という本質に迫っていき、情報の受け手のことを考えた意見が増えていった。対話によって、考えを深め、よりよい解決へとむかわせることができた**【手だて②】**。

第 13～15 時　実際に行動する

＜タイトル決め＞

はじめに個人で考え、「スクールタクト」に記入した後、小集団で一つのタイトル案を決めた**【手だて②】**。「悲しみをくり返さないために」「たくさんの人に対策が伝わるように」という理由から、三つの班が「水害から命を守るためには」というタイトル案を出した。このことから、子どもたちの切実感の高まりが見取れた。その後の学級での話合いの結果、危険だと伝わり、興味も惹きつけられる「危険度大！？六名の水害大調査」に決定した。

＜回覧板用のポスター制作＞

子どもは、つくったポスターを学区で暮らす人々にどのように見てもらうかについて、「スーパーに貼ってあったら見るかな」「ポストに入れる？」と、休み時間も話していた。その中で出てきたアイデアが、回覧板であった。「地域の人にお願いしよう」という声が子どもから上がり、地域の人を水害対策の「仲間」ととらえる様子がうかがえた**【手だて③】**。タブレット端末のアプリ「スクールタクト」を用い、チームで共同編集して制作した**【手だて④】**。子どもたちは、必要な情報や見やすさについて意見を出し合いながら、作業を進めた。完成したポスター【資料 11】に、「『５年５組発行』と入れよう！」と声があがったことから、「自分たちがつくり上げた」という実感をもったことがわかる。

学区を水害から守るため、大事な情報が伝わるかを追究しながらポスターをつくり上げる過程は、まさによりよい社会づくりをめざして課題解決のために行動する姿といえる。

【資料 11　完成したポスター（表面）】

＜映像制作＞

映像は、子ども自身でタブレット端末を用いて制作した**【手だて④】**。子どもは、タブレット端末に慣れ親しんでおり、互いの制作内容を認め合いながら、自分のチーム以外の撮影にも積極的に参加した。

映像は全校に放送した。子どもたちは、低学年から高学年までの全児童に内容が伝わることを心掛けて編集を行った。児童Ａが関わった班は、クイズを取り入れ、楽しみながら学区の過去の浸水被害について知ってもらえるよう工夫した【資料 12】。

放送後、「３年生が、水害怖いねって話してた」「弟が、クイズおもしろかったって言ってくれた」と話す子どもたちの顔は、実際に行動し、発信できたことによる達成感に満ち溢れていた。

【資料 12　子どもの作った映像】

４　考察

○　仮説Ⅰ「仲間とかかわりあいながら、課題意識をもつ」について

さまざまな資料や地域の人、雨水ポンプ場など、多様な「人・もの・こと」と出合うこと【手だて①】により、子どもたちは課題意識とともに、多角的な社会認識力をもつことができた。さらに、対話的活動【手だて②】を通して、課題意識をより強くもったり、よりよい解決に向けて考えを深めたりする姿が多く見られた。

○　仮説Ⅱ「仲間とかかわりあいながら、社会に参画しようとする」について

自分たちは「六名学区水害調査団」であるという意識【手だて③】は、主体的に課題を追究する姿勢につながった。また、発信の手段として地域の人の協力を仰いだことは、外部講師に対する「仲間」という認識だと捉えられる【手だて③】。また、タブレット端末の活用により、学級の仲間と協働して課題解決に取り組むことができた。【手だて④】。

児童Ａは、本単元前には、課題を自分事としてとらえ、継続して追究していく力が弱かった。しかし、ポスター及び映像制作後の振り返りでは「水害のことをどんどん勉強してきて作ったポスターや番組は、とても楽しくてやりがいがありました」と述べた【資料 13】。この背景にある思いは、「グループで話し合いながら作ったのも楽しかった」「学区の人たちに水害のことをよく知ってもらい、対策もしっかりやってもらいたい」という記述に表れている。児童Ａをはじめ子どもたちは、学区の水害に切実感をもち、精力的に活動することができた。また、実践の中で、仲間とかかわり合い、課題意識をもって追究し、やりがいをもって社会参画する姿も見られたと考える。

> 水害のことをどんどん勉強してきて作ったポスターや番組はとても楽しくてやりがいのあることだったと思いました。ポスターを作るときに資料を集めたりしたのも面白かったし、グループで話し合いながら作ったのも楽しかったです。
> 作ったものを見てもらった後、六名学区の人たちには水害のことをよく知ってもらい、それに対して対策もしっかりやってもらいたいと思います。

【資料 27　制作後の児童Ａの振り返り】

●　今後の課題

本実践では、自分たちの取り組みについて、学級で振り返りを共有する総括の場をもてなかった。また、夏休みに入り、学びが途切れてしまった。子どもたちが考え行動したことを価値づけ、次の課題へと学びを継続、発展させていくことを、今後の課題としたい。

【中学校第１学年における実践例】

話合い活動を通して自分の考えを練り直すことができる子どもの育成
～歴史的分野「聖徳太子の政策の是非を考える」話合い活動の実践を通して～

１　主題設定の理由

一昨年から続く新型コロナウイルス感染症感染拡大の猛威が止まらない。その影響で日本だけでなく世界の人々の暮らしが大きく変化した。感染症拡大を防止するため、不要不急の外出や対面での会話を控えたことで、人間関係が希薄となり、不安を感じる人も多くいる。現在、世界は新型コロナウイルス感染症の問題だけでなく、環境問題や貧困問題など、多くの正解のない問題に直面している。

子どもたちには､このような社会の中で生き抜く力を身につけることが求められている。そのためには、世界では何が起きているのか、メディアなどを通して情報を知り、その問題にどのように取り組んでいくべきなのかをさまざまな立場から考え、意見を持つことが大切だと考える。また、他者との話合い活動を通して、自分の考えを練り直していくことも大切だと考える。

本校の子どもは、個人での活動や話合い活動に意欲的に取り組んでいる。教員からの問いに対し、自分の考えをまとめ、積極的に述べることができる子どももいる。また、話合い活動においては、考えをまとめようと協力して取り組んでいたり、教え合ったりする姿を見ることもできる。

一方で、自分の考えをまとめたり、述べたりすることが苦手な子どももいる。また、他者の考えを聞いても、自分の考えに固執し、他者の考えと比較したり自分の考えを練り直そうとしたりする姿勢が見られない子どももいる。

そこで、本研究では、判断が分かれるような学習課題を設定し、その課題を追究する中で、社会的事象について自分自身の考えをまとめ、他者との話合い活動の中で、他者の考えを聞き、改めて自分自身の考えを練り直すことができる子どもを育てていきたいと考える。

＜めざす子ども像＞
話合い活動を通して自分の考えを練り直すことができる子ども

２　研究の手だて

(1) 教材化の工夫

飛鳥時代に活躍した人物として、聖徳太子がいることは多くの子どもが知っている既習の知識である。

聖徳太子が行った政策とその目的については小学校で学習しているが､その政治の｢よさ」や「課題」を考えることが、次の律令政治が成立した理由を理解することにつながると考える。

そこで、本実践では、学習課題「聖徳太子の政治はうまくいったのか、うまくいかなかったのか？」を設定し、聖徳太子が行った政策を一つ一つ整理し、天皇・豪族・民衆といったさまざまな立場から考えさせたい。聖徳太子という存在への子どもの興味関心は高いので、教科書や資料集の記述を参考にしながら、聖徳太子の政策を学習プリントにまとめ、話合い活動を通して、子どもは、自分自身の考えを形成し、自分とは異なる考えを受け止め、自分の考えを練り直すことができると考える。

(2) 学習過程の工夫

学習過程を「とらえる」「考える」「話し合う」「練り直す」の４段階で構成し実践の中に位置付ける。

学習段階	学習活動
とらえる	６世紀以降の東アジアの国々の動きを知り、日本への影響について理解する。
考える	聖徳太子の行った政策を、天皇・豪族・民衆の立場に立ち、政策がうまくいったのか、うまくいかなかったのか考える。
話し合う	聖徳太子の行った政策が「うまくいった」「うまくいかなかった」グループに分かれて話し合う。その際、互いの考えの良い点をワークシートに記述する。
練り直す	他者の考えを踏まえて、自分の考えを練り直す。

(3) 学習活動の工夫

子どもが自分の考えを形成できるようにするために、聖徳太子の政策を一つ一つ分けて整理する。そして、政策のメリット・デメリットに着目し、政策の問題について考える。こうすることで、聖徳太子の政治について、自分の考えを形成することができるようになると考える。

子どもが自分の考えを練り直し、最終的な考えを形成するために、自分の考えを伝えたり、他者の考えを聞いて受け止めたりする学習活動を設定する。子どもは、聖徳太子の政治がうまくいった、うまくいかなかったグループに分かれて話合い活動を行う。

子どもは､異なる考えの良い点をワークシートに記述し､異なる考えのよさに気付き、自分の考えを振り返って練り直すことができるようになる。

３　単元構想　【中１歴史】

段階	時間	学習内容	指導上の留意点
とらえる	1	○　６世紀以降の中国王朝の動きについて知る。 ○　当時の日本の為政者である聖徳太子の政治を確認する	○　朝鮮半島やイスラム世界の動きについても取り上げることで、日本と世界の比較ができるようにさせる。
学習課題：聖徳太子の政治は、うまくいったのか、うまくいかなかったのか？			
考える	2	○　聖徳太子の行った政策の目的について考える。	○　聖徳太子の業績に関する資料を掲示し、政策の目的について理解させる。
話し合う	3	○　グループ活動で互いの考えを発表する。	○　他者から聞いた新たな考えを色ペンで記入させる。
練り直す	4	○　話合い活動を通して、最終的な自分の考えを記入する。	○　考えの変容に気付かせ、他者の考えを踏まえて考えることの大切さに気付かせる。

４　研究の実際と考察

「捉える」段階（第１時）の様子

第１時では、教科書と資料集の記述から６世紀以降の中国や朝鮮半島、イスラム世界の動きについて学んだ。学習プリントも活用して、中国はシルクロードを利用して、イスラ

ム世界からヨーロッパまでとつながり、世界各地からさまざまなものが集まったことで国際都市として発展していったことをとらえることができた。また、中国に伝わった文化が日本に影響をもたらすことも学んだ。６世紀以降の日本の政治や文化が、外国の影響を受けていたことをとらえることができた。その上で、小学校で学習した聖徳太子の政治について確認し、学習課題「聖徳太子の政治はうまくいったのか、うまくいかなかったのか？」を提示した。そして考える際には、当時の東アジアの動きをふまえるようにも指示をした。

「考える」段階（第２時）の様子

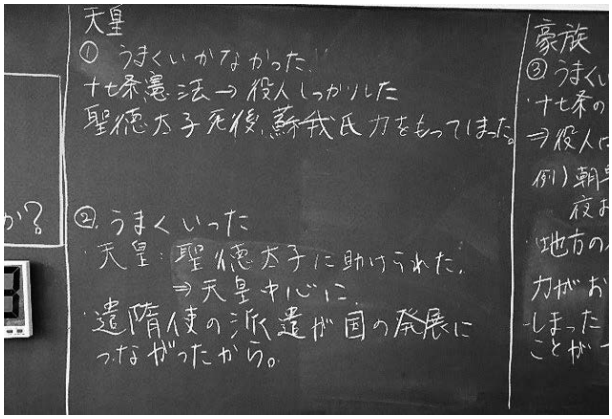
第２時では、教科書と資料集の記述から聖徳太子の行った政策の目的と内容について学んだ。聖徳太子は、「天皇を中心とする国家をつくる」ために、冠位十二階の制や十七条の憲法を制定したことをとらえることができた。

また、小野妹子らを派遣した遣隋使では、国書を受け取った隋の皇帝が激怒した理由についても確認した。「天子」という言葉に問題があったことを理解することができた。さらに、中国や西アジアの影響を受けていた飛鳥文化についても学び、法隆寺にある柱や広隆寺にある仏像がギリシャや朝鮮半島の影響を受けていたこともとらえることができた。

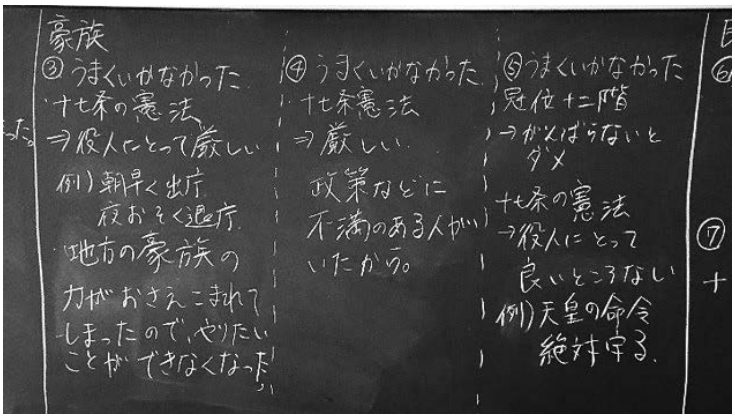
「話し合う」段階（第３時）の様子

第３時では、学習課題「聖徳太子の政　　治はうまくいったのか、うまくいかなかったのか」について考えた。個人で考えた後、３～５人のグループになり、天皇・豪族・民衆のそれぞれの立場に立って話合いを行った。教科書や資料集の記述をもとに、それぞれの立場の考えを協力しながらつくり出そうとしていた。

立場によっては、資料が少ないところもあったため、グループで協力して、政策の内容から想像して考えを導くグループも見られた。また、次時の発表にむけて、家庭でより詳しく調べて発表に臨もうとする子どもも見られた。多くの子どもが話合いを行う中で、他人の考えをしっかりと聞こうとする姿勢が見られた。



【資料１　天皇の立場の意見】



【資料２　豪族の立場の意見】

「練り直す」段階（第４時）の様子

４時間目では、前時にグループで話し合った内容を発表し、最終的な自分の考えをプリントに記入させた。天皇の立場からは、「聖徳太子が亡くなった後、蘇我氏が力をもってしまったため、天皇にとっては聖徳太子の政治がうまくいかなかった」という考えや、「聖徳太子の政策によって、天皇中心の国となり、遣隋使の派遣によって国を発展させることができたからよかった」という考えが出てきた。豪族の立場からは、「豪族同士の争いはなくなったが、十七条憲法の内容を守らなければならないという厳しさに、豪族は不満があったと思うのでよくなかった」という考えが出てきた。民衆の立場からは、「聖徳太子の政策は、役人がしっかりしたことで、農民に対する取り組みもしっかりと行われ、農民の生活が苦しくなったた

め、うまくいかなかった」という考えや、「能力や功績のある人が役人となったことで、税をむさぼり取られることがなく、裁判が公平に行われるためうまくいった」という考えが出てきた。

多くの子どもが、他のグループの考えを一生懸命聞き、プリントにメモを取る姿が見られた。最終的な考えを書く際には、自分たちのグループでつくり出した考えや他のグループの考えを参考にして自分の考えを記入することができた。

５　研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

話合い活動を活発に行えたことである。グループの人数を３～５人としたことで、普段発言が少ない子どもも発言することができる場となった。各立場について、どのグループも積極的に調べたり、考えたりしたことをふまえて、話合い活動を行うことができていた。

話合い活動や他のグループの考えを聞いて、子どもが自分自身の考えを練り直すことができたことである。資料６のように、活動前から活動後の記述を見ると、聖徳太子が行った政策を天皇・豪族・民衆それぞれの立場の考えを基に自分自身の考えをつくり上げることができていた。これは、学習課題を個人で考えた後、グループでの話合い、他のグループの考えを聞いたことで、他の考えのよい点に気付き、自分自身の考えを練り直すことができたためであると考える。

【資料３　考えを発表する様子】

【資料４　最終的な考えを記入する様子】

(2) 今後の課題

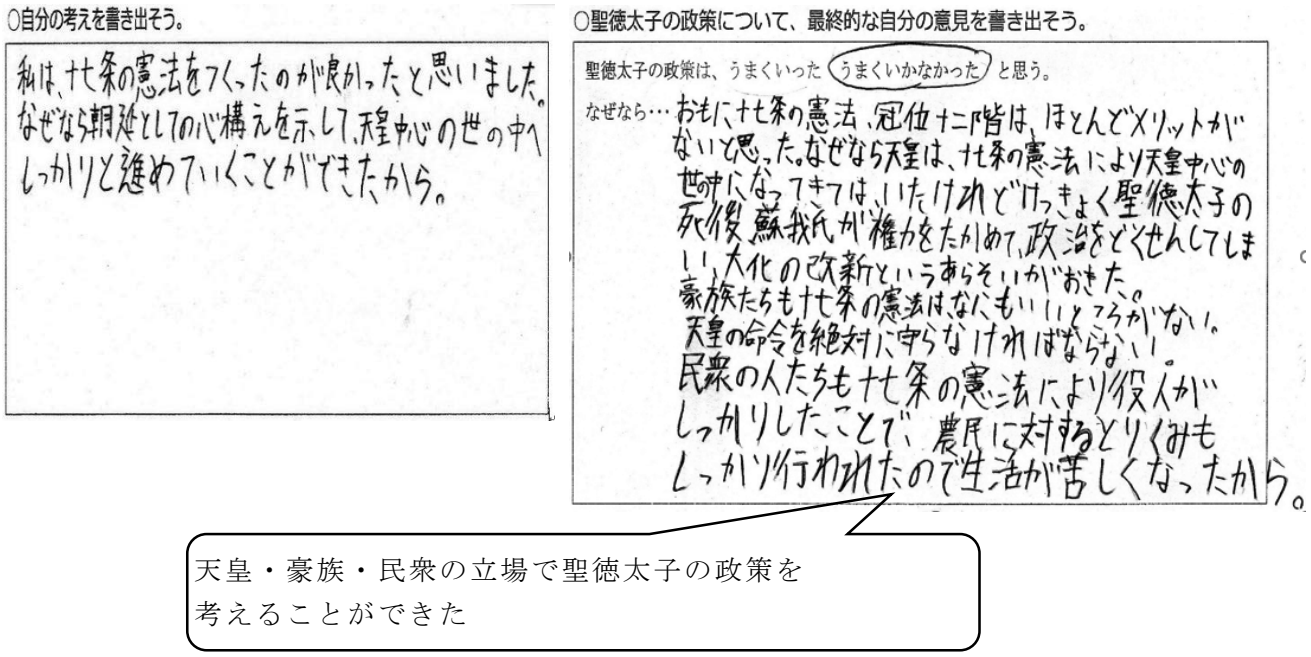
聖徳太子の政策について話合いをしていく際、教科書や資料集以外の資料がなかったため、立場によっては資料が少なくなってしまった。そのため、次に学習していく内容の資料を見たり、政策内容から想像させたりしたため、考えを生み出すことが難しくなってしまった。今後は、タブレット端末を活用して、さまざまなことを調べ、まとめられるようにさせていきたい。また、子どもが発表する際、グループの考えをすべて板書したため、板書に時間がかかり、発表時間や終的な考えを記入する時間が短くなってしまったことである。今後は、ＩＣＴ機器を活用して、子どもやグループの考えをタブレット端末で共有し、確認し合うことで、板書の時間を減らすことで、個人やグループでの活動の時間を十分に確保していきたい。

授業実践で行ったアンケートで「考えを自分の言葉でまとめること」が「得意」「まあまあ得意」と答えた割合が 41％から 61％に増加した。これは、話合い活動を通して、さまざまな考えを聞き、授業の最後に学習内容についてまとめる時間を設けたことで、学習内容を振り返りながら、自分の言葉で考えをまとめることに取り組んだからであると考える。しかし、考えをうまくまとめることができていない子どももいた。今後は、まとめを記入する際に、キーワードを提示したり、文字数を指定したりしてまとめを書けるようにさせ

ていきたい。

また、話合い活動において、自分の考えをうまく伝えることができない子どもが見られた。話合い活動の中で、子ども一人ひとりが考えを話す時間を設けることで、自分の考えを伝えることができるようにさせていきたい。

今回の授業では、個人とグループでの活動であったが、ディベートのようにグループ同士やクラス全体での活動に取り組み、自分の考えを練り直すことができるようにしていきたい。


○自分の考えを書き出そう。

私は、十七条の憲法をつくったのが良かったと思いました。なぜなら朝廷としての心構えを示して、天皇中心の世の中へしっかりと進めていくことができたから。

○聖徳太子の政策について、最終的な自分の意見を書き出そう。

聖徳太子の政策は、うまくいった　うまくいかなかった　と思う。

なぜなら…おもに十七条の憲法、冠位十二階は、ほとんどメリットがないと思った。なぜなら天皇は、十七条の憲法により天皇中心の世の中になってきては、いたけれどけっきょく聖徳太子の死後蘇我氏が権力をたかめて、政治をどくせんしてしまい、大化の改新というあらそいがおきた。豪族たちも十七条の憲法はなにもいいところがない。天皇の命令を絶対に守らなければならない。民衆の人たちも十七条の憲法により役人がしっかりしたことで、農民に対するとりくみもしっかり行われたので生活が苦しくなったから。

天皇・豪族・民衆の立場で聖徳太子の政策を考えることができた

【資料５　話合い活動前後の子どもＡの考えの変容】